

図書紹介

『万葉群像』 北山茂夫著 岩波新書

古 庄 ゆ き 子

本書は一九八〇年発行、八四年八月現在すでに第七刷をかぞえている。したがって、今改めて紹介するのは、いかにも時宜を失しているのだが、著者北山氏が昨年なくなられたので、戦後の万葉集研究に欠かせぬ足跡を印されたこの先学への追悼の意をこめて、晩年の著作となった本書をとりあげたい。

いうまでもないが、北山茂夫氏は八世紀政治史を中心とする日本古代史家である。その立場から氏は万葉にとり組み、しばしば「万葉」などの日本文学の専門誌にも論文を書き、後にあげるように、それらの論文を取録する形の、多くの著書を出版された。

北山氏の特徴は、万葉の作者たちを政治的人間としてとらえ、政治的人間であることと、文学創造者であることの関係を追求されたところにあった。例えば楠本人麻呂を「舎人と

いう具体的な官人関係で、宮廷詩人として活動しえた」人物とみ、律令体制を実現させつつある「白鳳の皇親政治」とそれがもたらした「宮廷の特殊な雰囲気」を考えるように。(『万葉の世紀』)また、山上憶良の「貧窮問答歌」を天平期の社会的動揺、奈良朝初期の農民闘争との関連でとらえ、この歌の背景に僧行基の動きや、絶望的境遇に押しつぶされ「彼にすぎるしかなかった何千何万の農民の慟哭」をみているように。(『万葉の世紀』)また、氏の大伴家持への関心が八世紀内乱の研究の中から浮び上ったものであるという点において、北山氏は家持の本領を「生涯つらぬいて政治家たるところにあった」とする。それに対して彼の「歌詠み」は、「多く私生活のなかのみやびであった」とみる。「歌わぬ人」となった後期の家持へ深い関心を寄せるもの、氏のこうした家持像から出るものであった。(『大伴家持』)北山氏の論考に接すると、

日本文学を学んでいるわたしたちが、ともすれば万葉人たちを自由な立場の、純粹の歌人とみがちなることを反省させられるのである。

本書の中には、しばしば北山氏の万葉のよみの歴史、影響をうけた研究書や論が語られている。これはかつての諸論考にもみられたものだが、改めて興味をそそられる。

氏が本格的に万葉全体の読破を志した契機となったのは、第二次大戦中の一九四二年に出版された保田与重郎氏の『万葉集の精神—その成立と大伴家持』であったという。

保田氏は、『万葉集の示す古典精神の眼目は、草琴の歌と草琴の心情の詩の論理が、皇国の道義に参するさまである』と主張、人麻呂や家持の歌の中に「愛国の悲願」「血の自信」「民の志」といったものを見つけていたのであったが、北山氏の万葉研究は、その論理や主張を疑い、反撥するところから出ている。北山氏の処女作ともいふべき「万葉人の生活と文化」はその成果で、「満身の力をこめて書いた」という。(本書序章)保田氏が「皇国の道義」を高唱するのに対して、「生活」を提起したところに、北山氏の本領がみられる。

この論文は、一九四二年末『三田新聞』「万葉探求」特集号にのり、のちに同氏著『奈良朝の政治と民衆』(一九四八年刊高桐書院)に収録された。また、これにかかわって一九六〇年には、『日本浪漫派の古典評価について』、『万葉集の創造的精神』(取)という古典評価のあり方をめぐる日本浪漫派批判の鋭い論文が書かれている。文学における古典評価の問題が歴

史家によって提起されるような、のびやかで、自由な雰囲気のある時代であった。

日本文学研究に歴史学の人々が果してきた、果している役割はきわめて大きい。古くは『文学に現はれたるわが国民思想の研究』の津田左右吉、現在では北村透谷研究の色川大吉氏などを考えればよい。とくに一九六〇年代には、歴史学者と文学研究者の間に交流が激しく、研究成果も競合し合う関係があった。万葉集では北山氏をはじめ、『記紀万葉の世界』の著者川崎庸之氏や『万葉時代の貴族生活の側面』というすぐれた論文を書かれた石母田正氏等々があつた。

北山氏の万葉関係の代表的著作をあげてみよう。

『万葉の世紀』(一九五三年刊 東大出版)、『万葉の時代』(一九五四年刊 岩波新書)、『万葉の創造的精神』(一九六〇年刊)、『大伴家持』(一九七一年刊 平凡社)、『柿本人麻呂』(一九七三年刊 岩波新書)、『続万葉の世紀』(一九七五年刊 東大出版)

「巻末の記」によれば本書は、一九八〇年、NHKラジオ放送第二で北山氏が語ったものを基にしながら、構想、内容を一新したもので、人物万葉集とでもいふべき内容である。

北山氏は本書執筆の前に家持に関する新説をいくつか打出されており、そのこともあずかって本書を書きおろされる気になったという。そのことからでも本書が単なる入門書、啓蒙書ではないことが明らかであろう。では純粹アカデミズムの産み出したものかというところでもない。不特定多数者に語

りかけるラジオ放送の原稿が基となっていることがすでにそのことを証明している。にもかかわらず本書はジャーヤリズチックなものではない。本書の特徴は入門・啓蒙書の役割と、高い学問的成果が共存しえているところにある。それがどうして可能になったか、氏にはラジオ放送を聞いて批評・感想を聞かせてくれる学友、知人、旧生徒という人々がいるらしい。本書も直接にはこうした人々の批評・感想に「力のかぎりこたえたもの」だという。入門、啓蒙的役割を担って、なお通俗に落ちないのは、氏の人柄や学問とのかかわり方によるものだろうが、具体的には鋭い批評者を身近かに持ちえているということが考えられる。

人物万葉集ともいべき本書でとりあげられているのは額田王・柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良・大伴家持・防人・大津皇子・大伴旅人・中臣宅守・茅上娘子。このうち大津皇子以下は放送時にはなく、本書を書く段階でとりあげたものである。

以上の人物が「古代王朝の興隆のなかで」「平城遷都の前後」「天平時代の潮流」の三項の中に収められているから、読者はこれらの作者とその作品とを、古代政治社会の中に位置づけてよむことになる。

本書の作品理解もユニークで、人民の貧窮を主題にしたという点で「貧窮問答歌」を長塚節の長歌「鉱毒地被害民の惨状を詠ずる歌」「海底問答」と合わせてよむし、「日本霊異記」巻下、第十九話のなかの尼僧の抗議をめぐるエピソードと、

「貧窮問答歌」の人間平等思想をかかわらせている。

ただ、一つ一つの作品のよみ、評価になると、文学の立場で読もうとされているにもかかわらず、歴史家の資料処理を感じるところが少なくない。北山氏は「歴史のなかの万葉」を明らかにし、「古代の貴族、地方豪族や農民の生活をよりよく把握する」ことを目的に「万葉の作品を深く読む」(本書序章)立場に立ち、「万葉の作品を深く読む」ことよって万葉人、そのくらしに思い及ぼそうとするのではないように思われる。もともと北山氏は世の多くの歴史家が文学作品を単に歴史資料として扱うとは異って、歌をよく読み、鑑賞し、その上に立つて論を展開されるのだが、それでも例えば人麻呂の「妻と別れて上る時の歌」の長歌の中心は後半部にあるとか、憶良の「貧窮問答歌」の力点が答の部分にあるとかいうような把え方になっているのである。この点、同じ歴史家の石母田正氏が、「万葉の歌は芸術作品として評価され、解釈されることよってのみ、はじめて歴史にとつての資料となるのであって、そのまま歴史の「資料」として存在するのではないのである」と主張され、大伴坂上郎女・坂上大嬢・家持の歌の解釈・鑑賞・分析を通して、万葉時代の貴族生活の一面を明らかにされたことがあった(万葉時代の貴族生活の一面「解釈と鑑賞」昭和三十一年十月特集増大号「万葉人の生活・社会・言語」取)ことを北山氏の作品のよみ方への批判としておもしろい出さずにおれない。

そうした点があったとしても、本書はなお興味深く、すぐ

れた万葉研究書である。一読をおすすめしたい。